

地域医療から広がる、 英語で伝える診療のかたち

大和市 武井 智昭

私は地域に根ざした診療を続けるなかで、日々の医療現場で感じたことを海外へ向けて発信する機会を得てきた。英語で記事を書くことは、単に日本語を置き換える作業ではない。日本の医療の現場感覚や、患者さんとの距離の近さ、制度の特徴を、異なる文化の読者にわかる言葉で届ける営みだと思っている。

これまでEuropean Business Review、Asia Sentinelに英語記事を提出し、日本の医療や社会について自分なりの視点を発信してきた。はじめは表現の硬さや文章の運びに迷うことも多かったが、相手に伝わる形を意識して書くうちに、自分の考えを整理し、少し離れた位置から見つめ直す習慣が身についた。また、この経験は英語圏の患者さんを診療するときにも大いに役立っている。症状や治療方針を説明するだけでなく、不安な気持ちに寄り添いながら話すには、言葉の正確さに加えて文化的背景への理解も欠かせない。

実際、英語で診療する場面では、難しい医学用語を並べるよりも、安心してもらえる言い回しや、相手の表情に合わせた説明の工夫が大切だと感じる。こうした経験を重ねるうちに、海外へ書いて伝えることと、目の前の患者さんにやさしく伝えることが、私の中でひとつにつながってきた。

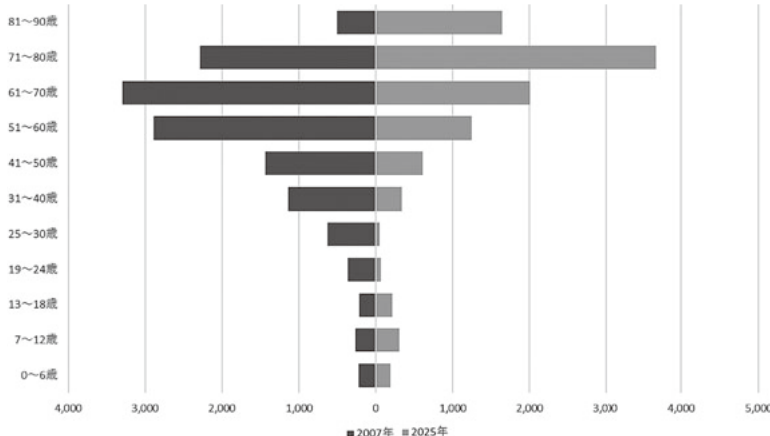


「得られる報酬」を常に天

「基礎ができていない」「才能も技術もないから描くだけ無駄だ」と、完膚なきまでに酷評されたのです。将来は個展を開くという夢を持っていた私が、人間のやる気とは脆いものです。一度失った意欲を取り戻すのは容易ではなく、私は筆を握ることすら嫌になっしまいました。特に80歳を目前に控えると、脳の仕組みが若者とは異なります。加齢によりワクワク感をもたらす「ドーパミン」や、心の平穏を保つ「セロトニン」の分泌が減少します。脳は「かかる労力」と

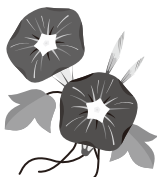
分析の結果は、想像以上に鮮明だった。かつて50代、60代として当院を支えていた方々は、今や70代、80代

歯科受診動態の変遷



2007年と2025年の来院層を比較した図では、中心層の高齢化と現役世代の減少が顕著です。

受診データを数値化したことで、これから目指すべき「寄り添う診療所」のあり方がより明確になった気がする。これからも、患者さんの人生の歩みに歩調を合わせ、この街の健康を永く見守り続けていきたいと考えている。



言葉の力と意欲の科学

川崎市麻生区 小関 新

「年寄りを殺すに刃物はいらぬ、一言悪口を言えばいい」という言葉の通り、否定的な言葉は高齢者の生きる活力を根こそぎ奪い去ります。

それでも、皆さん、負けてはいけません。たとえ心が折れそうになっても、最後のドーパミンを振り絞り、無理にでも「楽しいふり」をして続けてみてください。脳は行動に後からついてくるものです。形から入る楽しさが、やがて本物の意欲へと繋がり、私たちの人生を再び彩ってくれるはずです。

「生涯通院」を支えるために —平塚での18年、受診動態の変化から—

平塚市 久保田 守

昨年7月の日本歯科医療管理学会で発表した内容の一部である。

私たちの歯科医院がこの平塚の地に根を下ろし、日々患者さんと同じ合う中で、ふと周囲を見渡せば街の景色も、そして受診される方々の顔ぶれも少しずつ変化してきた。「受診者の年齢構成は、地域の人口動態を映し出す鏡である」——。そんな実感を感じ、私は当院における2007年から18年間にわたる来院動態を振り返ってみた。

へと人生のステージを進めている。中でも驚くべきは90歳以上の患者さんで、18年前と比較するとなんと約7倍にまで急増していた。その一方で現役世代は大幅に減少し、診療所の受診構造はこの短期間で劇的な変貌を遂げたのだ。

これらは単なる数字の移動ではない。日々、受付や診療室で起こる「小さな困りごと」の中に、その実態は隠れていた。かつては何気なく行われていた「靴を脱ぎ履きする」という動作や受付でのやり取り、診療室への移動。これらが、筋力や認知機能の変化を抱える方々にとっては、時に大きな不安や転倒のリスク、つまり「受診の壁」となる現実が浮き彫りになったのだ。

しかし、80代、90代になっても通い続けてくださる方がこれほど多いということは、バリアフリーの整備や心のこもった介助が、患者さんの「生涯通院」を支える大切なインフラであることを示している。かつての「標準的な環境」が、今では高年齢患者さんの障壁になつていないか。地域社会の役割をどう再考していくべきか。

英国の哲学者デレク・パーフィット（一九四二—二〇一七）は、主著『理由と人格』において「私」という確固たる実体を否定し、自分とは不変の自我などではなく、記憶や性格が織りなす「心理的連続性」の連なりに過ぎないというのだ。

この精緻な帰結は、東洋哲学の無我や無常の思想と通じるものがある。鎌倉時代の鴨長明が『方丈記』で「ゆく河の流れは絶えずして、しかもこの水にあらず」と喝破したように、自己とは淀みなく流れる河の熱中症や脱水でも、水分や電解質が失われれば思考は混濁し、理性は変容する。自己がいかに危うい基盤の上に流れているかを肉体は雄弁に物語るのだ。

身体の変化や病と照らし合わせてと一層切実な輪郭を帯びる。たとえば認知症において人は記憶の糸を少しずつ手放すが、過去が薄ら

いる。彼の哲学を日常に重ねるなら、炎天下で体を勞な存在になるかもしれない「未来の私」へ向けた純粹な利他なのである。我執を手放すパーフィットや長明の涼やかな視座とともに、「未来の私」という名の他者へ、この夏はそっと一杯の水を差し出したい。



デレク・パーフィットと 東洋の無我

川崎市川崎区 谷本 哲也